
カンピオーネ暴虐伝～オリピの秘宝～

EGG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ暴虐伝〜オリピの秘宝〜

【Nコード】

N9848X

【作者名】

EGG

【あらすじ】

西条祐一は転生者である。チート能力でウハウハしたいと言っただけで、カンピオーネ！の世界に放り込まれた。

西条祐一はカンピオーネである。神の権能と集めた神器を駆使し、今日も世界の危機として戦うのだ。多分

カンピオーネ！の世界でオリピオーネが好き勝手する予定です。

ある程度原作知識があるものとして書いております。主人公がいない部分は大体原作と同じように進むので、バツサリカットするか茶化しながら進めるかのどちらかです。説明不足な所も多いかもしれ

ません。

書くのも投稿するのも初めてですが、多くの二次に惹かれ、マンガも始まるし書いてみようかな?と思った次第です。読み難いかもしれないのですが、お付き合いいただければ幸いです。

作者の神話知識はマンガや小説から得られたのが全ての薄っぺらいモノです。Wikiを始めとして、主にWEBで調べはしますが、その程度なので、原作以上の神話の解体などは期待しないで下さい。

はじめに

太字、赤字、青字は単なる強調ですが、黒一色というのものなんなので、『うみねこのなく頃に』の文字ルールを使用させていただきました。その内金文字も出てくるかも？

読み難いから多分やらないと思いますが……。

赤字 断定。事実がどうあれ、このSS内では（どこか矛盾が無い限り）真実として扱う。

青字 推測。根拠ある否定が無い限り真実として扱う。

という感じで使っています。が、はっきり言っているんな意味で上手くいくかわかりません。

なお、会話文で大きくなっていたりするのは単に声が大きくなっていただけです。

無理でした。太字も色も文字サイズも全部潰れて均一に。くそう、インパクトが……

悔しいので、こういう事をやる予定だった、という事は伝えておきます。

できる方、やり方を教えて下さい。お願いします。

主人公オリピオーネの能力は当然チートですが、“カンピオーネの権能はどこか落とし穴がある”の方向性で作っております。主人公は欠点も理解しておりますので、隠しながら戦っていきます。

また、チートは権能だけでなく、体術、魔術も当てはまります。むしろこつちが本当のチート。

主人公を構成する元ネタの60〜70%はエロゲです。特に体術。

権能は半々かな？魔術は大体ガープス、降臨術はシャーマンキングと言ったところですよ。

簡単なものが多いですし、既に答えが出ているものもありますが、お暇があれば元になった神様や権能の欠点を当ててみて下さい。

あと、序章で奪った権能ですが、実のところ彼との対戦は主人公の権能を出す為に急遽でつち上げたので、まだ詳しくは設定していません。取り敢えず複数の能力を持つ《東方の軍神》と同タイプの権能にするつもりです。

元々は単にオリピが好き勝手するSSだったので、1話書いた時点でカンピオーネ！キャラクターのツツコミと化してしまいました。先を知っているが故の暴走です。アンチをする意図は全くありませんが、原作者様が「お前が言っな！」を連発するだけあって、ツツコミどころが多いのです。

拙い文ではありますが、「あー、あるある」と思っただけであれば幸いです。

序章

地上の何所でもない場所、生と不死の境界のある平野でその戦争は行われていた。

その騎士は父や弟たち、そして共に叔父王を奉じた騎士仲間、20名程とその10倍の兵卒を従えて王の仇たる神殺しに決戦を挑んだのである。

しかし、結果は無残なものだった。仇敵たる神殺しは、何所から取り出したのか床几に腰掛けたまま一步も動かず、呼び出した配下に掃討を命じるのみであった。

自分や騎士仲間はまつろわぬ身ではないとは言え、それでも一騎当千の強者である。だが、一般兵にまでそれを求めるのは酷である。

彼らは神使として最低限の強さを備えていたが、騎士たちの足元にも及ばない。敵にも強力な兵が多数いたし、魔獣や幻獣の類、強力な火箭を放つ鋼の箱（騎士は知る由も無いが、ようするに近代戦車である）の群れは騎士たちを以ってしても簡単には打ち破れなかった。包囲を破った者も居るには居たが、神殺しに攻撃を仕掛ける前に中空に魔方陣を描くように展開された武器の群れから放たれる雷火によって討たれた。

一方的に蹂躪されたと言う訳ではなかったが、肝心の神殺しにはあらゆる意味でダメージが無い。その身に掠り傷の一つも無ければ、権能で呼び出された軍隊相手に消耗を強いたところで何の痛痒も無いのだから。

騎士はこのままでは自分達は無駄死にだと理解している。起死回生を求めて一騎討ちを申し込んだが、無視された。

「王よ、面目次第もございません。アヴァロンに取り残され御身の仇を探す事も出来ず、しかし、時を経て仇敵と会い見える幸運に浴しながらも、掠り傷一つ付けられぬまま……。おお、主よ！何故あの男に神をも殺める運命と力を与え給うたのか！？願わくば、せめ

て一太刀、一矢報いる力をお与え下さい!!」
無念と絶望が吐き出させたことだま絶叫だった。もはや、敗北は避けられない。仲間たちも殆どが討ち取られ、神殺しの権能に取り込まれて、先刻まで味方だった自分に武器を向けている。恐らく自分も直ぐにそうなるのだろう。人ならぬ騎士をして、遣る瀬無さだけが募るのであった。

ところで、この騎士はまつろわぬ神として顕現した、とある物語の王である軍神の眷属（神獣クラス）である。しかし、彼自身もまた物語の主人公と成り得る存在であり、元はと言えば古き太陽の神格まで行き着く英雄である。そしてここは生と不死の境界、アストラ界と呼ばれる場所である。世界の過去と未来、その総てが記されているとされる場所であり、不死の領域　神話の世界と繋がる場所だった。

実際に彼の言うところの“主”が力を貸してくれたのかは解からない。何が如何作用したのかなど結果の前には些細な事である。そう、神話の世界より騎士の前身たる神の、英雄の力が降臨し、彼をしてまつろわぬ神と成さしめたと言う結果の前には……。

「おお……主よ、感謝します!」
彼は敬虔なキリスト教徒だった。少なくとも物語ではそうになっている。聖杯探索の音頭も執つたし、失敗はしたが実際に探索もした。だが、まつろわぬ神　別に天使ではない　が一神教の神に祈り、感謝を捧げるのは如何なんだろう?と神殺し　西条祐一は思ったが、

「確かに貴方は俺に勝ち得る力を手に入れた。兵たちではもはや相手にもならない。望み通り、一騎討ちと言うことになる」
旗下の兵では勝てなくなったのも事実なので、ようやく腰を上げたのであった。

「神殺しよ、私は卿を討ち滅ぼし、仲間たちの無念を雪いだ上で地上に舞い戻り、今一度我が王を復活せしめる！」

猛々しい宣言。しかし、彼はその方法を知っているのだろうか？彼を召喚したのはその王なのだから……。

「あの時、我が朋友と共に居た魔女めが王復活の鍵なのであるう？理も論も弁えぬ猪と思われては心外だぞ」

「そいつは失礼。じゃあ、始めようか？」

顔色から読まれたのであろう疑問を返されたのも軽く流し、祐一は剣を取り構える。

「応、では、尋常に果たし合おうではないか！」

騎士の言葉と同時に祐一は高速移動の権能も駆使して襲い掛かる。

彼にとつては両者が剣を構え、開戦の言葉を放ったなら決闘は開始なのである。だが、

「いきなり獣のように襲ってくるとは……。先程までの泰然とした態度は、我らなど取るに足らぬ存在だと言いたかったのかな？それとも、卿自らと戦い得る騎士を前にして気が昂ぶったか？」

流星は太陽の騎士、余裕を持って受け止められた。力も剛力無双を誇る彼の方が上である。

「しかし、卿の力がこの程度のはずは無いな。この程度の輩に我が王が敗れたとは思えぬ！……さあ、本気を出せ！」

剣を合わせたまま強引に振りぬかれ、祐一は吹き飛ばされてしまっただが、すぐさま体勢を立て直す。

実のところ彼の権能はさして戦闘向きではない。好戦的な性格で、且つ攻撃的な権能もあるのだが、神を殺めるには総じて攻撃力が足りないのである。その分大した副作用も発動条件も無いのだが……。だからこそ彼はその威力を自分以外に求めた。周囲に浮かぶ武器がその典型例である。これらの武器は、一部神具という強力な物もあるが、基本的に呪力を流せば一つの（炎を出したり、稲妻を出したり、強風を出したりする）魔術を放つだけのものである。しかし、神殺しの大呪力と周囲の力を集束し放つ権能を使えばいずれは神を

も殺める力となる。時間は掛かるが。神具に至っては、そもそも神が自分の為に作り出したと言うシロモノなので、まつろわぬ神相手であろうと問題無く効果を発揮する。事実、彼が今手にしている剣は、エリンの四秘宝の一つであり、斬れぬもの無しと謳われた又アザの剣である。先程の攻撃も呪力を込めていれば敵を剣ごと真つ二つにした事だろう。しかし、折角の機会なのだから直ぐに終わらせるのは勿体無いというもの。

結局のところ、彼はまつろわぬ神となった騎士を前にしても、舐めて掛かっていたのである。緒戦で優勢だった事もあって、切り替えるには少しばかり時間が掛かりそうだった。

とは言っても終わりと言うのは訪れるもの。時間にしてなら十数分だが、彼らは共に神速の遣い手であり、事実、既に何百合、何千合と切り結んでいる。騎士の攻撃は速く、力強く、技芸に富んだものであった。流石は湖の騎士に最高の称号を譲るまではその位置にあった太陽の騎士である。だが、それだけだ。どうやら、この騎士の権能は敵を討ち滅ぼす剣と言うよりも、生き残る力、継戦能力に重きを置いている様だった。実際、一度生き返っている。いや、敵の心臓を撃ちぬく光の槍も有ったのだが、祐一は呪力を打ち消し、吸収する権能を所持していたので一度きりしか使われなかった。エネルギーを操る力といい吸収する力といい、純粋なエネルギーに強い男なのである。

ともあれ、

「あんたが生き汚い奴だと言うのは良く解かった。だが、一日にそう何度も蘇れる筈も無し、決着を付けさせて貰うぞ！」

「自信の根拠は卿のその魔剣か？一度は殺られたが、そう何度も喰らいはせんよ！……しかし、決着を付けるのは望むところ。確かに残された太陽のちから神力は残り僅か、しかも卿は私の力を自分の

ものとする事が出来るときている。しかし、私も見切ったぞ。その力は我が剣の内に籠めた神力までは取り込めない。よしんば取り込めたとしても僅かばかりのはずだ！」

次の一合で決着を付ける 共にその覚悟を決める。騎士は有らん限りの神力をその剣に籠め、……神殺しは左眼を真紅に染めた。「！！！」

驚きは始め、声にもならなかった。自分と戦い、“神殺しも疲弊している”その感触は彼にも有った。それが如何だろう！？左眼が真紅に染まった瞬間、神殺しから初めに対峙した時よりも膨大な呪力が吹き荒れ、さらに強大な活力を与えているではないか！！

いや、それ以前にこれは王が自身と臣下たる自分たちをより強大にするために使う権能ではなかったか？

「それは魔王殲滅の力！！何故、神殺しの魔王たる卿が使えると言うのだ！？」

狼狽は致命的な隙だった。今の祐一はその隙を見逃すほど優しくも油断しても居ない。決闘が始まった時と同じく、しかし今度は剣に必殺の意志と呪力を籠めて……斬り捨てた。

何故魔王殲滅の権能が使えるのか、など言う質問は不粹である。何処かの剣神から篡奪したに決まっているからだ。神殺しの権能のメカニズムなんて当の本人にすら解かっていない。パンドラ 全ての神殺しの義母であり、人間に神の権能を与えるのだと言う女神にでも聞けば解かるのだろうか？……まあ、聞いた所でどうなる訳でも無し、祐一も気にした事は無かったので如何でも良かった。

「八つ目の権能か……。今度はどんなのだろうか？次こそすぐ出せて、神様相手でもダメージが与えられるやつが良いんだけどな」

今まで得た権能のメカニズムより、これから得る権能がどんなものか考える方が楽しいし、建設的だと祐一は思っている。因みに“こ

の権能には、微妙に彼の思い描く様な力は無かった” と言う事が解かるのはもう少し先であった。

序章（後書き）

主人公の権能を見せる導入部。

大切なのは戦闘シーンじゃありません。

もっと上手く書ければ良いのですが……（TAT）

グリニッジレポート

2000年10月に賢人議会の調査員が提出した西条祐一についての報告書より抜粋

彼は1999年12月31日にアンゴルモア大王（本人談、篡奪した権能より何処かの嵐神であると思われる）を殺めカンピオーネになった少年です。しかし、現地の魔術組織『正史編纂委員会』ですらその状況を知りません。『古老』なる彼らのオブザーバーが事後で説明してきたと言っています。

（中略）

彼は古老の頭目である『ご老公』の直弟子だという事もあり、正史編纂委員会に形の上でのみ所属しているということになっていますが、今は勿論、以前においても彼に対して指揮権を有している訳ではありません。

（中略）

さて、先程もうしあげた通り、彼は巫覡の才を持つ神官ではありませんが、術者として大成したか？と言えば疑問でしょう。なぜなら、呪力を溜める資質が無かったからです。彼の身体は普通の呪力を溜めません。教会や神殿（日本で言うところの寺社仏閣など）の聖なる威力に清められた、或いは人間の手の入っていない純粹な自然の精气のみしか蓄えないのです。そしてこれが彼をして神殺しと言う偉業を成さしめるのです。

（中略）

彼には降臨術の素質がありました。巫覡の才と清らかなる呪力のみを蓄える身体と言うのは、至純の精气の固まりであるまつろわぬ神にとって非常に居心地が良かったのでしょう。彼は『天之尾羽張』なる神剣を手に入れました。或いは魅入られたと言うべきでしょうか。

(中略)

以上から、彼と彼の神剣にはアストラル界に行き来できる能力が具わっていたと考えて良いでしょう。アストラル界で戦闘が起こった為、我々は一人として新たな神殺しの誕生を見守る事が出来なかったのです。

2008年度 西条祐一についての報告より抜粋

この恐るべき魔王が(本格的に)出現して早四年の月日が流れました。イタリアの剣の王サルバトーレ卿と時を同じくして出現した、年の近い、しかし彼よりも四年は早くカンピオーネになった彼は、それまで目立った動きが無かったのにも関わらず、各地で戦いを繰り広げる様になりました。まるで自らが弑し奉った戦神オーデインの権能に操られるかのように……。

(中略)

どこからその資金を調達しているのか?彼の戦場は紛争地域だけではなく経済界にもあるという事は御存知の事と思います。そこで得た資金で以って多数の傭兵や暗殺者を雇い入れ、戦いの園へと舞い戻るのであります。

(中略)

彼の権能は現在で既に七つあると言われております。彼自身優秀な術者であり、カンピオーネ特有の膨大な呪力をも有しておりますので、どれが魔術でどれが権能か解からない事もあるのですが、彼と(比較的)仲の良いブラックプリンス黒王子やサルバトーレ卿から漏れ聞く所に依れば間違いないと思います。

さて我々が現在把握し名付けた権能は《神気発衝》(Power Shot Breaker)《追跡者》(The Chasers)《斬?》(Absorption Force)《王威の魔剣》(

Knights of the Round) 《叡智の左眼》(Left Eye of Glory)の五つ。残り二つは正確な能力が伝わっておりません。もっとも、この五つも伝わった事が全てだとは思いませんが……。

(中略)

彼は戦いに関する依頼は(報酬次第ですが)意外と簡単に引き受けてくれます。しかし、嘗てよりの蒐集癖(彼は黒王子と共に知られる神器のコレクターであり、探索者です。もっとも、強引に借りて行くという事は無いのですが……)は変わりありませんので、結社の秘匿する神具を差し出せと言われるかも知れないことはご承知置き下さい。

一話 七雄神社にて

草薙護堂は神殺しである。キャリアは二ヶ月程度だし、世間様（と言つても裏の世界）に認知されていても言い難い。しかし例え本人が認めたくなくてもその事実は覆せないのだ。

草薙護堂は名跡クラッシャーである。カンピオーネと成つてからの彼は、肩をぶつ壊されて野球が出来なくなった鬱憤を晴らすかのごとくイタリアの各地を破壊している。ミラノのスフォルツェスコ城、パレルモのフェリーチェ門、サルデーニャのカリアリ港、シエナのカンポ広場、そしてつい先日にもローマのコロッセオ。来年にはギリシャの財政破綻と言うビッグニュースがユーロ圏を直撃すると言うのに、その前にイタリアの財政破綻を報じさせる気なのだろうか？カンピオーネは一魔王（天災）だから損害賠償請求も出来ねーのである。この世界のユーロ圏の未来は暗そうだ。……サルバトーレやヴオバンも居るし。

しかし、言い訳させてもらうなら悪いのは彼一人ではない。諸悪の根源とまでは言わないが、2人ばかり断罪されても良いんじゃないかな？と言う人物が居る。

一人は彼の愛人であるところのエリカ・ブランデッリ。彼女は愛人（と勝手に名乗っている）の立場をフルに利用し、断れない（理由をつけて）護堂に無理やり自分の厄介事を押し付け、彼の名声を高められているのである。『魔王である彼を心の底から本気で愛している』から許されると言うレベルでは当然ない。その頻度と成果はイタリアの活動家たちなど及びもつかないほどののだ。許されているのはひとえに魔王の後ろ盾あつてこそである。

そしていま一人は、野球で彼を刺して肩をぶつ壊した少年Aである。彼がもし護堂の肩を壊さなければ、護堂は多分神殺しには成らなかつただろう。故に数々の破壊も無かつたはずである。まあ、今更だが。

そんな彼が向かっている先は七雄神社と言つところである。別に“ム力つくから破壊しに行く”という事ではない……はずだ。コロッセオ破壊の折にエリカからとある神具を預かったのだが、どうもそれが正史編纂委員会とかいう日本の呪術組織（多分である。しかし万里谷祐理とかいう巫女の独断だとは思えない）の琴線に触れたらしく、持って来いと言付かったのだ。天下の魔王カンピオーネに対してである。という訳で彼は余所様の神具を持って日本の神社に参ろうという罰当たりな事をしているのである。

他に場所は無かったのだろうか？別に話すだけなら喫茶店でも良いし、内密でも何処かの店を貸切にする事ぐらい出来たはずである。そんな益体も無い事を考えながら長い石段を登りきり、鳥居を潜つたところで、

「よくいらして下さいました、草薙護堂さま。カンピオーネである御身をお呼び立てした無礼、お許しくださいませ」と、深々と頭を垂れた巫女さんに出迎えられた。

昨日万里谷祐理について、護堂の妹である静花は『すごい』と連呼した。妹のボキャブラリーの貧困さを少々憂慮しながらも“頭が少し可哀想な美少女？”と理解したものである。本人が近くに居るのに電話を代わらないのは 静花にも非が有るにせよ おかしな事である。『明日は用事があるから無理』と言われる事を想像しなかつたのだろうか？

「万里谷祐理と申します。昨日はいきなりお電話をおかけして、失礼いたしました」

確かに美少女だった。上げた顔から上品さと、予想外にも聡明さが伝わってくる。しかし、どこか抜けているのは間違いない。失礼なのはいきなり電話をかけてきた事では無い。そもそも電話とはそういうものである。

何より失礼なのは“自分の用件だけ告げて、こちらの都合も聞かなくいまま一方的に約束事を押し付けた事”である。勿論自分が居なければそれで良い。しかし『横に居たんだから都合くらい聞けよ』と

いう事である。代わると言わなかった静花も悪いが、代わるという発想自体が無かった万里谷祐理はそもそも断られる事を考えなかったと言う事でもある。

護堂がヴォバンみたいな性格なら、今頃七雄神社はこの世に無い。正史編纂委員会も終了のお報せを届けられた事だろう。護堂が庶民派を自称するような偽善者で助かったと言うところだろう。よくもまあ、こんな世間知らずを一人で使者に立てたものである。責任は上司にも行くというのに……。

「なあ、君も魔術師たちの仲間でいいんだよな？ほら、ヨーロッパにいるみたいだ。日本の連中に会うのは初めてだ」

「はい。……あまり十把一絡げにくくられたくないのですが、そのご認識に大きな誤りはありません。私は武蔵野を守護する巫女のひとりとして、この社でお勤めをしております。ささやかですが、呪術の心得もございます」

十把一絡げにくくられたくないと言ったが、護堂にはどうしても別モノだと思えなかった。エリカといい、ルクレチアといい、人の事なんかお構いなしに自分の都合を押し付けてくれるのである。経験の浅い護堂が“魔術なんて怪しい技術を学ぶ女は人の都合を考えない”と思ってしまうても仕方のない事であろう。

「……ええと、万里谷さんはひとりだけ？誰か、他の人はいないの？」

出来れば誰かに同席してもらいたい。健全な10代半ばの男子だし、美少女は決して嫌いではない。が、いきなり二人きりはハードルが高い。

「はい。今は私ひとりしかおりません。ですから、御身の逆鱗に触れるような失態がありましても、罪は私ひとりのものとなります。どうぞ、お怒りは我が身のみ下されるよう、ご寛恕を請いとうございます」

「あの、万里谷さん？今、変なこと言わなかった？」

「荒ぶる魔王たる御身のお怒りは、私ごとき殺めたところで収まる

ものではないと承知の上で申し上げます。何卒、関わりなき無辜の民を戯れに踏み潰すような真似は、お慎み下さいませ。慈悲と寛容を示すお振る舞いは、王者の人徳にございます。全ての咎は、どうか私ひとりにのみ帰するものとご容赦下さい」

誰かに同席してもらいたい。出来れば上司の方に。

この巫女さんのような（多分）下っ端一人で人死に出るような罪が贖えるというなら使用者責任なんていらなし、責任を取るために居る責任者なんていらないのである。おっと、思考がおかしいな。どうやら動揺しているらしい。

「ツツコミどころがありすぎて困るんだけど、まずひとつ。俺が君をどうするって言うんだよ？俺はネ口でも董卓でも織田信長でもないぞ。誰が殺したりするか！」

「……それはつまり、命を奪うだけでは飽き足らないという意味なのでしょうか？」

「じゃなくて。いいか、俺はごく真つ当な文明人で、荒っぽいことは嫌いなんだ。その辺りを少し理解して欲しいんだけど」

「………はい。もう覚悟は決めております。私をお騷りあそばすと言つのであれば、お望みのままになさいませ。すぐには楽にさせないと、おっしゃりたいのでしょうか？」

「全然わかってないじゃないか！俺に拷問の趣味は無い！」

誰かに同席してもらいたい、切実に！誰でも良いから話の通じる人に！

と、ここで護堂は少し奇妙な事に気付いた。たとえ魔術師といえども、自分がカンピオーネである事を知るものは少ないはずだ。実際数日前にローマで会った大魔術師たちも、国内であれだけ暴れ回って狼藉の限りを尽くしたというのに、エリカとの決闘で権能を目にするまでは疑ってかかっていた。

不毛な話の流れを変えるために水を向けてみる事にした。

「君はどうして、俺がカンピオーネだと断言できるんだ？」

「それが私の力です。私の目は、この世の神秘を読み解く霊眼

なのです。……以前、ヴォバン侯やサルバトーレ卿、そして草薙さまの御従兄にあたる西条さまにもお会いしたことがございます。カンピオーネ　　羅刹王の化身たる方々を見誤ったりはいたしません」と言いつつ、数カ月後“アニー・チャールトンがジョン・プルート・スミスというカンピオーネである”ということを見抜けなかったりするのだが……。JPSと見抜かなくてもカンピオーネであるということくらい見抜こうぜ。トカゲが教主だという事は見抜いたんだから。

それは兎も角、ヴォバンの事は護堂も話に聞いている。カンピオーネの中でも有数の危険人物だと。

と言つてもカンピオーネ自体八人しか居ない。一人は隠居状態だが、残りは全員傍迷惑さを振り撒いている。

サルバトーレとの事は記憶にも新しい。陽気なラテン気質の兄ちゃんで、ヘラヘラ笑いながら万象総てを切り裂く魔剣で斬りかかってくるようなキチナイスガイだ。

最後に従兄である西条祐一は護堂　　と言つよりは身内に対しては気遣いもあるし普通なのだが、『他人のためにタダで働くのは嫌だ！』と豪語する人物でもある。軽く躁鬱の気があるようで、基本的には明るい性質なのだが気難しく感じる部分もあり、扱いの難しい男ではある。初対面の人には厳しいだろう。

なるほど、こんな奴らに会ったんじゃあ、カンピオーネに偏見を持つのも無理も無い。

実のところ偏見でもなんでも無いのだが……。

「そ、それでか。大丈夫、そいつらはカンピオーネ有数の危険人物だから。そういう奴はカンピオーネの中でも少数派のはずだぞ。一緒にしないで欲しいんだけど」

護堂は『俺はそいつらみたいにな奴じゃない。いたって平凡な人間だと滲ませて言い放つ。』

しかし、良識ある読者諸兄はご存知だろう。八人中三人は少数派とは言えないし、そもそもカンピオーネという輩はすべからず傍迷惑

な存在であるという事を……。しかも、殆どのヤツに悪気は無いのである。

ヴオバン侯爵は戯れに嵐を呼んで一つの町を吹き飛ばし、生あるもの全てを塩の塊にするような奴で、羅濠教主は己の姿を見た者の目を潰し、声を聞いた者の耳を削ぎ落とす。

黒王子アレクは人に安楽椅子探偵というシャーロック・ホームズみたいな事を要求するくせに、自分はしつかり足で情報と証拠品を（時に他人から強引に！しかも返さない！！）稼いでくるのである。奴の安楽椅子はキャスター付きだ、間違いない。

ジョン・プルトー・スミスは秘匿すべき魔術（及び権能と異形の存在）を、ロサンゼルスという大都市で、特に隠蔽する事も無く、というかむしろ大々的に披露している。唐突に落雷が巨大な建造物を破壊したかと思えば巨人が現れ、地震がきたかと思えば毒を吐き出す怪鳥が現れ、光が消えたかと思うと黒豹が現れ走り去るのである。何より恐ろしいのは、既に住人が慣れきっていることである。

西条祐一は紛争地帯に戦乱を呼び込む男で、サルバトーレ・ドニは剣で語る事しか出来ない　　というかする気の無いダメ人間。

そして最後に、草薙護堂は事ある毎に何所かを破壊するのである。それも多くの　　というか、ほとんどの場合観光地の名跡を……。それがどういう事かわかっているのだろうか？修復の為に大金が投じられ（国家予算なので税金が重く押し掛かる）、その間観光客は呼べないから収益は大幅にダウンである（ご当地の方に死ねと言いたいのか）。そして反省はするも、悪びれない。気の毒に思いながらも、弁償はしない。

カンピオーネとは概ねそんな奴らである。なお、この評言は正確では無い、実際にはこれよりも酷い奴らなのである。

「ご謙遜を。あなたさまがイタリアの各地で下されたお怒りの激しさは私も承知しております。あれほどの破壊の数々、まさに魔王の

所業です。恐ろしい方……」

「……い、いや、別に腹いせに壊したわけじゃないんだけど。そう
だ、それより万里谷さん、その話し方はやめてくれないか？俺と同
じ一年生なんだから。タメ口でいいよ、俺もそうするからさ」

話を变えても、いや、より深みに嵌った気がする。ので、さらに話
を変える。言葉使いが変れば雰囲気も変わるかもしれない。

「申し訳ございません、私の口の利きように至らぬところがあつた
のですね。失礼をいたしました。……ところで、タメ口とは何の事
でしょう？」

しかし、このお嬢様の辞書に“タメ口”は載っていないようだ。ス
ラングだしね。

護堂は住む世界の格差を痛感した。

しかし、彼女の家より歴史も格式もある四家のお嬢様がた（ついで
にこのお嬢様の妹さま）の辞書にはちゃんと載っているので、育ち
云々より性格だろう。

まあ、住む世界なんてどうでも良いことである。だって地球は丸い
のだから……。

「もつとフランクに行こうぜ、ってことだよ。敬語とか肩が凝るだ
ろ？聞いているほうも落ち着かないしさ。俺は君の事万里谷って呼ぶ
から、そっちも呼び捨てにしてくれ。なんだつたらあだ名でもいい」

「そんな！？……困ります。身分だって違いますし、男性を呼び捨
てにだなんてしたことありませんし」

恥じらいながら祐理が言う。この辺りはお嬢様っばい。

余談だが、恵那も馨もあれで目上（年齢という意味ではない。年齢
と立場が逆転しているのは間々あることである）と男性を呼び捨て
にした事が無い。冬姫はお嬢様としてはどうなんだろう？

だんだん同じ国の住人とは思えなくなってきた。でも大丈夫、一万
円札の人は『天は人の上にも下にも人を創らないよ』って言った
し……。

ついでに言えば、ごくごく平凡な（怪しい付き合いのある）一般市

民（カンピオーネは裏世界の王様）と外食チエーン店会長の孫娘だと、間違いないと祐理の方が上流階級である。護堂に裏世界の特権を使う気は今のところない。

「……まあ、あんまり無理しなくてもいいけど、せめて、もう少し気楽に話してくれ。あと、様とか付けて呼ぶのもなしで頼む」

「はあ……。努力いたします、その、草薙　さん」

こちらの反応をうかがう祐理に護堂はうなずいた。

同い年の娘に『さん』付けされるのもくすぐったいが、『様』よりは100倍マシだ。なにより学校で彼女に『様』付けされた日には、自分は（主に社会的に）抹殺されるかもしれない。そう、クラスメイトの三バカあたりに……。いや、奴らなら直接手段に訴えるか？

「では、草薙……。さんをお願いがあります。あなたがローマから持ち帰ったという神具を、お見せいただけませんか？」

脳内で迫り来る三バカを撃退していると、真面目な表情に戻った祐理が訴えた。

特に異論があった訳ではない、と言うかそのために来たのである。

メダル　　ゴルゴネイオンを取り出し、渡す。

何故メダルの事を知っているかなど聞かない。望むと望まざるに関わらず、自分の影響力は承知させられている、常時でなくとも監視ぐらいは付いているだろう。でなくては自分がイタリアから神器を持って帰ったかなんてどう調べるといふのだ？

監視を付けたくなくなる気持ちはわかる。どこを壊されるかわかったもんじゃないのだから……。何しろ自分でわからない。

考えつつポケっつとしてみると、祐理の鑑定は終わったようだ。

「恐らくですが、古い、そう、ひどく古い神格にまつわる聖印です。蛇神、オロチの印……。いえ、もっと根源的な、母なる大地と巡る螺旋の刻印　　」

目を細め、謹厳な雰囲気です。祐理が言う。

「これは只の直感なのですが、このメダルは北アフリカで出土した物かもしれません。エジプト、アルジェリア……。その辺りのことが

何となく思い浮かびます」

彼女は自身の力を『この世の神秘を読み解く霊眼』と言った。知識による鑑定ではなく、霊視による預言だったらしい。僅かながら漏れ聞くところによれば護堂の従兄もこの能力があるとかないとか……。

しかし、出土地がアフリカとは意外だった。ギリシャとばかり思っていたからだ。

「草薙さん、ひとつ質問をさせて下さい」

ぐるぐると考え込む護堂に、祐理が訪ねてきた。答え？勿論聞かない。質問するぞと言う宣言である。

「これは明らかに『まつろわぬ神』の神具です。カンピオーネであるあなたが、それに気付かないはずはありませんよね？」

「ん、まあ、そうだよなア……。やっぱり神様がらみのヤバイ物だよなあ……」

石で叩き割ろうとしても、糸鋸で切ろうとしても、チェーンソーで真つ二つにしようとしてもどうにもならなかったシロモノだ。不可思議な力が宿っているのは間違いない。

「あなたは、この東京で禍つ神呼び寄せるおつもりなのですか！？地元住人の安全を、なんだとお思いですか！」

頷いたら、雷が落ちた。美人が怒るととっても迫力があるものである。

だが、護堂にも言い分がある。下手な三文芝居で押し付けられたのも事実だが、現地の皆さんにはカンピオーネが現在絶賛サボリ中バカンスのため居ないのである。なら自分が引き受ける方が犠牲も少ないだろう。

「ほら、一応俺は神様とも戦えるしさ！それにこれを欲しがるのつて、あっちの方の女神様らしいから、大丈夫じゃないかな？あの連中、たぶん日本の位置も国名も知らないはずだぞ」

「じゃないかな？……で、要らぬ危険を冒さないで下さいませ。草薙さんの調査書を読んだときから気になっていました。あなたは周

困への配慮が足りなすぎです」

もつとも日本（正史編纂委員会）からすれば、掘り起こして持って来たのは欧州の魔術師なのだから、厄介事も現地で引き受けて欲しいところである。どちらにも道理はあるのだ。

実際、護堂の配慮の足りなさは憂慮すべき事柄だ。……主に正史編纂委員会が。

悩み、苦勞するのはいつだって下っ端なのだ！

「大いなる力には、大いなる責任も伴うと申します。だというのに、草薙さんはあまりに無責任ではありませんか。四年前に私は御従兄の西条さまに救われました。あの方は今も私財を投じて紛争地域に平和を促すべく、戦っていらっしやるとのこと。それなのに、あなたはこんな曰くありげな神具を、愛人の女性にせがまれるまま故国に持ち帰るだなんて」

いま、従兄について変な事を聞いた気がするが、それ以上におかしな事を聞いた。

あいじん愛人 現在日本国においては、愛する人と捉えられることはまずない。一般的には二号さんとかお妾さんの別称である。これはバブル期の『愛人契約』とか言うものの名残らしい。これが廃れると、次に『援助交際』とか言う言葉が作られた。

アイレン愛人 中国語においてその言葉は、文字通り愛する人と捉えられる。恋人ととる事もあれば『夫』『妻』ととる事もある。

欧州でも恋人を日本語に直訳すると愛人になりかねない。ましてや、草薙護堂の愛人と目されている少女は香港留学の経験もあるのだ。護堂は基本的に甲斐性のある男が何人困おうと良いと思っっている。だが、自分にはその甲斐性というものが無いとも思っている。本命も居ないのに愛人なんて……ということである。

要するにふたりとも見事に勘違いしているのだが、正すべき正史編纂委員会が面白おかしくするためにあえてそのままにして置いた可能性もある。

この後、その愛人 エリカ・ブランデッリがでてくるまで、不毛

な言い争いが続くのだが、都合によりカットする。

あと、万里谷祐理は勘違いしている。多分ノブレスオブリージユのことだろうが、あれは大いなる力に義務が宿るのではなく、高い地位に相応しい義務と権利なのだ。カンピオーネは“代表戦士”“覇者”であって“国王”でも“領主”でもない。魔術師どもが勝手に崇めているだけで、正式な地位もノブレスオブリージユも存在しない。

王者の仁徳？……ハツ！領土もなく、民も居らず、法も無い。故に余所の臣民のことなど考える必要は無いのだ。

そして、カンピオーネという輩は基本そんな事を気にするような連中ではない。流石に全員ではないが、考えている人も単なる誇大妄想のようなもので、都合の良い所だけ見て都合の悪いところは華麗にスルーである。

どちらがよりマシかは議論の余地もあるだろう。ぶっちゃけ、どっちもどっちだが……。

長く美しい赤みがかった金髪、身にまとう華麗な雰囲気、整った顔立ち。

衆目を集めることが当然と言わんばかりの不遜さと、気高いまでの誇り高さ。両者が絶妙のバランスで釣り合う覇気に満ちた表情が、生まれ持った美貌と合わさり一層輝かせている。だが『綺麗な薔薇には棘がある』の言葉どおり、それだけの娘ではない。勇猛と狡知、武断と権謀術数をも兼ね備えた才色兼備の令嬢（ミラノ在住）。エリカ・ブランデッリとはそんな少女だ。

そんな彼女が日本の神社の境内に出現する。実にミスマツチだ。

「ちょうど、俺と万里谷は、おまえから渡されたゴルゴネイオンの話をしてたんだ。……もしかして、日本に来たのはアレがらみの理

由じゃないだろうな？」

実際、直前に話していたのは愛人云々の誤解を如何に解くかである。しかし護堂もカンピオーネの端くれ、(カットしたが)直前までじやれていたエリカの所業ともども柵の上に放り上げた。

「鋭い。A評価をあげてもいいわね。　　実は、わたしたちよりも先に来たのを追いかけて、日本まで飛んできたのよ」
エリカも心得たもので、あっさり話題を変えた。

「……来たって、何が？」

訊くべきではない。訊いたらまずい。でも、訊いちゃう。

護堂だつて何が来たかぐらい察しはつく。一縷の望みを掛けたが、現実は無情である。

見れば祐理の顔色が蒼白になっている。どうやら、不吉の予兆を靈視してしまったらしい。いや、別にそんなものなくても話の流れから自ずと導かれる。

まさか、神器を横取りしようとは何処かの魔術師が来たわけではあるまい。

「もちろん『まつろわぬ神』が。護堂がローマで会った女神様と特徴が一致するわね」

「やっぱりかよ！ああ、やっぱりこうなった。東京都民にどう言い訳すればいいんだ!？」

「ローマでも言ったけど、気にしない気にしない。王の気まぐれで街ひとつ滅ぶ事なんて、ヨーロッパじゃ日常茶飯事なんだから。ほら、これで東京も世界標準ね」

「あの時も言ったけど、いい加減な嘘をつくな！」

あまりにもあんまりなエリカの言葉に、祐理が口をパクパクさせている。東京が空前絶後?の災厄に見舞われるのは半分以上この女のせいだ!

なお、護堂はエリカの言葉を嘘と断じたが、大袈裟ではあっても嘘ではない。

何故ならあそこにはヴォバンが居るからだ!!

奴ならやる。というか、侯爵の名はそのようにして篡奪されたのだ。「何でローマから追いかけてこれるんだよ？俺は自分の出身地なんて話してないぞ！？」

そこは神様の不思議パワーである。正しく人智を超えた輩に何を言っているのやら。

結局神殺しであろうと神ならぬ身の人間に、神々の限界を窺い知ることなど不可能なのである。少なくとも護堂はそう感じた。が、彼が楽天的すぎただけということも無きにしも非ず。

「その点に関しては、わたしたちが甘かったみたい。海を越えた程度じゃ、誤魔化せなかつたのね。……まあ、来てしまったものは仕方ないし、撃退の方法を考えましょう」

「他人事みたいに言うな。神様を連れ込んだ罪はおまえが主犯、俺が共犯なんだからなッ」

「そ、それで降臨した『まつろわぬ神』は今どこに？名前　神の御名はなんとおっしゃるのですか！？」

エリカは護堂の質問に対し『わかつてるわよ』と言いたげに手を振ったあと、祐理に振り向き、

「すこし前から話を聞いてたんだけど、あなたは靈視術の使い手みたいね。ちようどいいから、どこの神様が来たのか託宣してちようだい」

投げた。

質問を質問で返すのはいけないが、質問を命令で返すのは良いのだろうか？

エリカと祐理は初対面である。

禍を持ち込んだ原因の一部は間違いなくこの女である。

だと言うのに、威丈高に命令した！

言葉こそお願いの形をとっていても、態度・口調が完全に命令である。

そして、これが『エリカ・ブランデッリ』と言う女なのだ。

相棒がこんな奴なので護堂は誠心誠意、平身低頭お願いした。

祐理はぶつくさ言いながらも、東京がまつろわぬ神の襲来でめっちゃくちゃになるよりはと思ったのか、霊視してくれた。まあ、単にお願いを断れなかっただけかもしれないが……。

『なんでも見える便利な力ではない』と言いつつ60%オーバーの的中率を誇るらしい預言の巫女は、この時もその力を発揮し、見事その御名を暴いた。

神の御名はアテナ　日本でも名前くらいは大体の人が『知っている』と言わしめるほどのビッグネームである。

この後、祐理はアテナ迎撃に赴く護堂からゴルゴネイオンを取り上げた。

『アテナが探している品をわざわざ持参して、どうするおつもりですか！それは私がお預かりします。　もう、本当に仕方のない人ですね！』

という事らしい。

“交渉とかにも使えるんじゃないかな？”とも考えた護堂だが、祐理のあまりの迫力に思わず渡してしまったのである。エリカも何も言わなかったので、『まあ、いいか』となったのである。

以上、七雄神社境内での出来事である。最初から最後まで立ち話。茶菓子はおろか、茶すら出てきていないマジである。この話を書くために一巻読み返したら、全部鳥居の辺りでの出来事なのである。ぶっちゃけ部屋に移動したと思っていた。いただく、いただかないは個々人の自由だが、茶ぐらい出せよ。

都合も聞かずに人を呼びつけておいて、家にも上げず、茶も出さず、説教し、しかし客人が持参した貴重な品物はなんだかんだと言って取り上げる、纏めるところである。

本当にこの娘はカンピオーネ＝貴人或いは魔王だと思っているのだろうか？あまりにも礼儀に適っていない。

いや、彼女も緊張してたんだと思う。そうであって欲しいと切に望む。

一話 七雄神社にて（後書き）

カンピオーネ！の言いたいところの半分くらいを吐き出した第一話元の構想とはかけ離れましたが満足です。

でも、中身は原作と変わってないなあ。とお思いの方、暫く待っていただきたい。神様も強化していきますので、後の方になるにつれて変わっていくはずですよ。

主人公であるオリピオーネは暫く出てきません。でも、アテナとは戦う予定。3話が4話で出てきそう。

当SSは『鋼』及びアテナの強化を応援します。

二話 千葉での戦い（護堂編）

その少女は人ならぬ美しさだった。

画家や彫刻家が見れば『表現する事が出来ぬ』と絶望のあまり憤死する……かどつかは知らないが、とにかく誰が見ても言葉に出来ないくらい美しいと言うだろう。

それも当然である。彼女は絶世の美女が多いとされるギリシャ神話の女神たちの中でもトップ3に入る美貌なのだから。個人的にこのエピソードは色々と思うところがあるのだが……。

アテナ 知恵、芸術、工芸、戦略を司るオリュンポス十二神の柱である。

このアテナはローマの地で顕現したためミネルヴァの権能も保持している。即ち、詩文、医学、商業、製織、魔術である。梟を聖鳥とするため、一部夜を象徴する部分もあるが、権能として保有する程でもない。

聖木のオリーブは平和を象徴し、戦争の正義の守護者として知られる。『守る為には力が必要だ』という事だろう。『平和を望むならば戦いに備えよ』《Si Vis Pacem Para Bellum》というラテン語の諺もあるし……。

また、彼女は戦乱の軍神・アレスをボコボコにするだけの武力を誇り、ギガントマキアーでも自ら武器を取って戦った戦女神である。

（この時討ち取ったパラスという巨人の皮で盾を作ったとか……）

単なる『“鋼の英雄”の介添人』ではないのだ。

なお、万里谷祐理は『その位と齡を剥奪された女神……故に小さく……故にまつろわず』と霊視したが、彼女は実のところ『オリュポスのアテナ』としてはほぼ完成している。無いのはゴルゴンの盾のみで、ようするに“ペルセウスによるメドゥーサ討伐”前のアテナである。

彼女の見た目はローティーン、下手をすればプレティーンにも見え

るが、これでも彼女は成人している。実年齢とかではなく、そもそも成人の概念が今と昔では違うと言う事である。

彼女は処女神で、そしてその権能は割りと男性的である。なぜならゼウスを超え得る神であり、且つ男ではないと言う役割が与えられたからだ。男を好きになれないくせに、男を守護し、常に父の味方であると言う難儀な設定をしているのだ。まあ、征服した方とされた方の力関係の結果でもある。まだ彼女はマシな方だと言うものだ。

……。

主権の眞奪

おそらく、古の大地母神から天と地の聖婚によって分離した際に、“蛇”“冥府”“四季”“母性”を剥奪されたのだろう。一部名残があるが“死”と“夜”の権能も剥奪されている。

小さく幼いのは確かに神話に大地母神としての位を剥奪されたからだが、まつろわぬ神になったのはそのせいではない。ゴルゴネイオン出土に釣られたのかも知れないが……。

自らに関与する神具を回収するのは“まつろわぬ神”の宿命である。神話よりの強制であり、より強力に、より自由になるための習性なのである。とりあえずこの話では！

そんな彼女が千葉の海辺に来臨しようとしていた。

さて、どこでどうやって手に入れてくるのかわからないが、アテナの服装は実に当世風だ。イタリアで会った時もそうだった様に思える。

薄手のセーターとミニのスカート、黒いニーソックスなどを着込み、頭には青いニット帽を乗せている。これが顕現したときから着ている古代ギリシャの神の装束だと言うなら、話は別だが、その場合はいろいろな常識が完膚なきまでに破壊される事になる。

「久しいな、神殺しよ。妾はあなたと再会できて喜ばしく思う」
銀の髪と黒の瞳を持つ美貌の幼神が、古風な言い回しで告げたその

言葉は、聞くものをうつとりさせるほど可憐な旋律だったが、告げられた護堂にそれを楽しむ余裕は無い。

「俺は喜ばしくない。あんたたちは平和に暮らしている人間を巻き込んで、いらん騒ぎを引き起こすだけだからな。はっきり言って、迷惑だ」

「エピメテウスの申し子にしては、良識ある発言だ。あなたは珍しい神殺しだな」

そうのたまう女神は、あまり好戦的に見えなかったが、安心はできない。神々の思考や行動は人間の基準では予測できないからだ。

アテナは悪神ではない。むしろ善神だ。世が世なら国家を挙げて彼女を奉り、庇護を求めてもよいほどの……。

彼女にとって人間は庇護する対象である。守護もしよう、慈しみもしよう、しかし加減はできない。

また、同時に「人間が道を外さないように規律も必要」『10の内9を救うために1を犠牲にする』という思考も持っている。

悪気はなく、むしろ好意で必要以上に強大な力を振り回すからこそ、まつろわぬ神は善神であっても迷惑で厄介な存在なのである。

「まずは名乗ろうか。妾はアテナの名を所有する神である。以後、見知りおくがいい。東方の神殺しよ、あなたの名を聞きたい。これより古の《蛇》を賭けて対決する我らなれば、互いの名を知らずに済ませる訳にもいくまい」

「俺の方には、あんたと戦う理由は一つも無いぞ」

「あなたは古き帝都よりゴルゴネイオンを持ち去った。《蛇》を妾より遠ざける者は、何者であれ妾の敵だ。もつとも、あなたが妾に《蛇》を返すと言うならば話は別だが……」

そんな訳が無い、と思っっているような口ぶりだった。

勿論、護堂にゴルゴネイオン返却の意思は無い。ついでに手元にも無い。

まあ、ただでさえ強力なアテナをこれ以上強壮にさせても人間様にとってメリットは何も無いのである。満足してどこかに引籠もると

か言つのなら渡してもいいかな」と思っているが。

「さあ、聞かせてもらおうか、あなたの名を」

「……草薙護堂だ。それと、そっちにいるのはエリカ・ブランデッリ。あんまり人間を無視するな。神様だろうが何だろうが、すごく失礼だぞ」

エリカをちらりと見ながら、護堂は名乗った。

ちなみに、これは一応決闘の名乗りである。アテナはそう宣言したはずだが、護堂は聞き飛ばしたのだろうか？

確かに、アテナに限らず神々というのは、神殺しでもなければ人間の個体など気にしない。

それを失礼と取るならそれは仕方がないが、神と神殺しの決闘にサマリと単なる人間を巻き込む護堂は非道である。アテナは一騎討ちの心算かもしれないぞ。

「草薙護堂。耳慣れぬ、異邦の男らしき名だな。覚えておこう」
アテナはエリカの名を聞き流した。

護堂は少々ムツとしたが、もう一度言う、これは決闘の名乗りである。聞き届けてしまえば、戦う時には古の作法に則って殺さねばならない。無関心から来る無視ではあるが、これもある意味情けであり、優しさである。

「さて草薙護堂よ、重ねて問おう。ゴルゴネイオンは何処にある？」

「あのな……俺が大人しく教えると思うのか？」

「思わぬよ。が、まずは訊いておきたい。闘神としての妾の心は草薙護堂を敵だと認め、戦えと叫んでおる。しかし、智慧の女神たる心は警告を発しておる」

深淵にも似たアテナの黒い瞳が、興味深そうに見開かれていた。

「あなたは奇妙な神殺しだ。我が同胞から奪い取った力は、まだ少ないはず。しかし、アテナをアテナたらしめる機知が、あなたを危険だと告げている。迂闊に手を出せば、手痛い反撃を受けそうなので……畏にも似た脅威を感じておるのだよ。故に、改めて問う。その返答によって対応を決めよう。妾はアテナ、闘争と智慧の女神である。」

和するもよし、争うもよし。さあ、あなたの答えは如何に？」

「できれば和を取りたいんだけどな、俺は……。断るよ、逆に提案するけど、ゴルゴネイオンのことは諦めて、このまま帰ってもらえないか。無益な戦いでお互いに傷つけ合うよりもその方が賢いと思うんだけどな」

神具は渡せない、しかし戦いは避けたい。護堂は意外に理性的な女神の姿勢に、“何とか交渉で妥協点を見出せないか？”と話を持ちかけた。

しかし、これでは交渉でもなんでもない、単なる恫喝である。

そもそも神殺しの魔王カンピオーネが自分の神具を持っていったから、こんな極東まで来たのだ。

アテナは承知していた、神殺しと見える事を、神殺しと相争うだろうという事を。

草薙護堂は気付かない、護堂にとっては無益な戦いでも、アテナにとっては古の自分に還るための聖戦だと！

つまり、

『お前らが勝手に持って行った自分の神具を返してくるなら戦わなくても良いよ』

と、アテナが交渉してきたので、

『返せません、でも帰れ！』

と、護堂が返したのだ。

この男にとってはこれが交渉なのだろう、ひどい話である。

妥協点というなら“ゴルゴネイオンを返す”の一言に尽きる。それとも他に何か代わりになる物があるのだろうか？

そして、ゴルゴネイオンを返せば“神の誓い”に則り、護堂と和睦し、日本から立ち去っただろう。神は基本的に、一度約束した事を反故にする事は無いのだ。それこそ裏切りの神とかでない限りは。結局、戦うしかなかった。

「あなたは神殺しにしては善良な男だ。闘士としては度し難く、王としては愚かしいほどに。しかし、それは逆に未来の英雄たる者の器と言えるやもしれぬ。確かに、我ら神々とあなたたち神殺しの闘争は、互いのみならず民草まで際限なく傷つけよう！だが、あなたのその言い分は妾も受け入れる事はできぬ！」

この上は刃にて決着を付けるべし、そう宣言したアテナは、当世風の衣装から古代ギリシャ風の貫頭衣に改まった。その上から胸甲を纏い、兜を被り、槍と盾を持った。簡素ではあるが、古代ギリシャ風の軍装である。（当然、某八十八星座の聖衣を纏った集団のボスとは違い武器に忌避感はない。ちなみにそのボスも設定上は13歳である）

「神様っていうのは、なんでこう好戦的なやつらばかりなんだ！？」あんな交渉で追払えるかもしれないと思っていたらしい護堂は、自分の事を心の棚に上げて罵った。

とは言え、神様に襲われてボケっとしている訳にもいかない。

この女神に使えるそうな化身はなんだ？

雄牛 見た目よりは力がありそうだが、どうもパワーファイターでは無いらしい。或いは剛力の権能があるとしても使っていないのか？少なくとも現在は使用不可。

白馬 今のところ人々を苦しめているわけではなさそうだ。使用不可。

駱駝 あの槍でブスリ刺されれば使えるだろう。しかし好んでやりたくない。保留。

猪 こんな所ですか？この辺一帯が更地になるぞ！いや、白馬も似たようなものだが……。保留。

鳳 通用するか？時間内に倒しきれるか？攻めきれずに時間切れになったら動けなくなるから、真つ先に使うべき化身ではない。保留。

戦士 アテナ用の剣を研いでいない。使用不可。

なんというか、碌でもない能力ばかりである。

比較的使いやすい『雄牛』が使えないだけでこの有様。結局のところ『駱駝』か『鳳』しかない。変な意地を張らず、エリカに教授して貰っておくべきだったか？

いや、今更だ。腹を括るしかない。

「よい顔になったぞ、草薙護堂！ さあ、アテナの槍を受けるがよい！」

言葉と共に繰り出される槍は、もの凄く速い。

一発喰らって『駱駝』になろうと思っていたが、なんかそのまま別の世界に旅立ってそんな攻撃だったので、後先考えず『鳳』を使う事にした。

世界が遅くなる、否、護堂が速くなりすぎているのだ。閃光のようなアテナの槍がとつてもスローだ。

「む、それがあなたの権能か？その速度、身のこなし、まさしく神鳥のようだ！」

近くにいるはずのアテナの賞賛も、どこか遠くから聞こえるかのようだ。

この化身の特徴は速度と時間感覚の加速、そして身の軽さの上昇である。しかし、自分でも速すぎて上手く身体を動かせないのが難点だ。

攻撃を避けるのには便利だが、こちらの攻撃も当て難いのである。

しかも、時間と共に心臓が痛くなり、時間切れになると全身が麻痺する。

“この化身になった以上時間をかけるべきではない”そう判断し、護堂はアテナに果敢に攻めかかる。

一瞬で距離を詰め、右フック。外れた。30cm以上も離れてやがる。

返すアテナの攻撃を避ける。

と、ここでアテナの動きが変わった。

妙にカクカクしたビデオのコマ送りにも似た突きの拳動、これは『

鳳』の神速を破る闘技！先日サルバトーレ・ドニと戦った際に見せられた奥義であった。しかもドニのそれより技術自体は数段上である。さすが闘神。

まさかアテナまでこの技が使えるとは思っていなかった護堂は、何とか避けようとしたものの、意外に伸びた槍の穂先に心臓を抉られたのだった。

二話 千葉での戦い（護堂編）（後書き）

元大地母神で、ヘパイストスにぶっかけられ、ポセイドンと敵対した。アイギスを持ち、アルキュオネウスをヘラクレスとともに引きずり出し打殺したアテナ。

なにか思い浮かびませんか？

アテナたん強化フラグ

ここまで、勢いだけで書きました。

プロットは全て頭の中、いつ矛盾が出るかわかったもんじゃありません。

投稿準備でクールダウン。

何分はじめてなので、見直しはしましたが、いろいろ不具合（誤字とか、ルビが振れてないとか）あると思います。その時はこっそり教えて下さい。

どうやら、アルファベットにルビは打てず、アルファベットのルビも打てないようだ。ぐはッ

三話 アテナ再臨（前書き）

なぜ、タイトルをあんなにしたのだろうか？昨夜の自分からな
い。

因みに、カンピオーネが暴虐の限りを尽くすのではなく、カンピオ
ーネ！キャラクターの傍若無人ぶりに慄いていたらあんな感じにな
りました。

でも、良い案は浮かばないので暫くほっときます。

三話 アテナ再臨

「我は主の御名を告げ、世界の中心にて御身を讃え、帰依し奉る！」
あつという間に終わつた護堂とアテナの戦いにエリカは舌を打つた。
援護のために絶望の呪詛を唱えたのに、完成する頃にはやられていたのだから、文句の一つも言いたいだらう。

やはり無理やりにも 教授 しておくべきだった。護堂が嫌がるのとアンナの運転でそれどころではなかったとは言え、神と戦うには準備をしすぎるといふことは無い。

まあ、護堂はしぶといから死にはしないだらう。

「女神アテナ、草薙護堂の騎士たるエリカ・ブランデッリが請います。疾くこの場を去り給え。この願いを聞き届け給われぬのであれば、我が剣を以て主を守護いたしましょう」

原作では不意打ちだった。

とは言え、一介の魔術師風情が勝てるほどまつろわぬ神は甘くない。実力よりも運とめぐり合わせと不屈の闘志が勝利を呼ぶのだ。

しかもこのアテナは強化版。不意打ちなど無く正面から護堂を突き殺した。

いかに神々が人間を舐めてかかる、いや、殆ど認識できないとはいえ、無謀である。

「ほう。プロメテウスの継嗣にしてヘルメスの門下たる者よ、そなたは主のために身を捨てるのか？」

アテナは勇士を好む。それが本当に正しいかどうかはともかく、正義と信じて戦うそのあり方を好ましく感じるのだ。……それが女であればなおのこと。

故に、はじめてアテナはエリカを見た。まるでペットの猫を見るような目だった。

「必要とあらば。わたしは騎士。主と誇りのために死すのであれば、それも本望。アテナを最古に連なる女神を敵に回すのですから、そ

の程度の覚悟は決めております」

エリカが主と定めた護堂は、欠点が実に多い。

エセ平和主義でお人よし。権能の使い勝手も悪ければ、女のあしらいも悪い。

特に女に気を持たせて放置は非道に過ぎるし、そもそも女など自分ひとりだけを見て満足していれば良いのだ。

今回前者の悪癖は裏目に出なかったようだが、こんな美少女とのキスを拒んで敗死するというのは戦いを舐めているとしか思えない。

今度から強引にでも 教授 しよう、そのための大義名分はできた。

と勝手に結論付けたエリカは、さてどうやってこの場を切り抜けようかと考えをめぐらせた。

護堂は死んでも生き返る、『雄羊』の化身の力で……。しかし、再生中に止めを刺されても生き返れるかは不明だし、試したいとも思わない。

まずは、アテナを護堂から引き離す必要がある。

「本当に世話の焼ける人なんだから。このわたしに、ここまでさせるなんて」

愚痴りながらもエリカは、言霊を矢のように撃ち込んだ。

並の人間なら即死、かなり上位の魔術師でも衰弱は免れない。

しかしカンピオーネなら？そしてまつろわぬ神ならば如何に？

まあ、効く訳が無いのである。こんな攻撃で何とかなるようなら世にはカンピオーネが溢れている。

やはり危険であつても白兵戦しかない。

エリカはクオレ・デイ・レオーネを剣から長槍に変え、

「鋼の獅子よ、汝に嘆きと怒りの言霊を託す。神の子と聖霊の慟哭を宿し、聖なる末期の血を浴びて、ロンギヌスの聖槍を顕しめよ」

「！」

絶望の言霊を籠めた。

ロンギヌス 直訳すると兵士の槍……という意味らしい。人名という説もある。カエサル暗殺の首謀者に、ガイウス・カッシウス・

ロンギヌスという人もいたので、そういう家名の人もいるだろう。どちらにせよこの槍自体は“ローマ帝国の支給品である”、という事だけは確かなはずだ。まあ、どっちでも良い。重要なのは神の子の血を受けているかどうかなのだから。当然だが、エリカの愛剣クオレ・デイ・レオーネは神の子の血など浴びていない。ならば、この言霊こそ神の子の血である。故に、この呪詛の槍は神に対しても効果がある！

まあ、どれだけ武器が優秀でも当たらなければ意味は無い。槍に対して剣で挑むのは不利、と槍に変えたところで技量が圧倒的に負けている。

両手で放った突きが片手の、それも軽く手首を捻っただけの槍に絡め取られ、空に放り上げられた。

「あの槍は我が身にとっても危険な物だ。或いは、妾を殺める事すら可能かもしれない。惜しいかな、その程度の技ではアテナたる闘神に打ち込む事はできぬ。とはいえ、その覚悟、忠義は見事。ふふ、神殺しなどに忠義立てせねば、我が愛子として格別の加護を授けてやりたいところなのだ」

飼い猫が狩りの成果を見せに来たのを見るような　まあ、ネズミやゴキブリを見せに来られても困るだけだが　慈しむ庇護者のまなざし。

「人の子よ、ヘルメスの門徒よ。まもなくアポロンの時は終わり、アルテミスが母レトを伴いやつて来る。太母ポイペも、恥らうアステリアも、女だけになれば出てこよう。アテナたる妾が《蛇》を取り戻し、女王として再臨するに当たっては、この上ない立会人であると言えよう」

邪魔をするな、邪魔立てするなら始末する。そんな意図がありありと窺える。

護堂は3時間ほどは目を覚ますまい。

「獅子よ、汝に使命を授ける。引き裂け、穿て、噛み砕け！打倒せ

よ、殲滅せよ、勝利せよ！我は汝にこの戦場を委ねる」

飛ばされ、転がっていた槍に偽りの息吹を吹き込み、命令を下す。鋼の獅子となったクオレ・デイ・レオーネは猛然と襲い掛かる。

アテナも慌てず応戦する、が、次の瞬間には驚嘆の表情を浮かべた。突いても意味無しと、払い、切り裂いた鋼の獅子がどんと分裂していくのだ。

「クオレ・デイ・レオーネ！汝、聖霊と聖者の加護を賜りし者よ。

不滅の身を以て、使命を果たせ！」

都合7体、その段階で仕上げを施した。

すると、その内の一体が護堂を搔つ攫い、エリカを乗せると一目散に逃げ出した。

残り6体は捨て駒である。時間を稼いでいる間に逃げる、逃げる。時間稼ぎが効いたのか、興味がなくなつたのか、アテナは結局追つてこなかった。

夜 アテナが言うところのレトの時間。まあ、他にも夜の神は（ギリシヤ神話だけでも）数多くいるが、一家全員が天空神なので引用したのだろう。

立会人は別にヘカテやセレネでも構わない。太陽よりは、大いなる夜闇と大地の女神こそが相応しい。古の大地母神・アテナは冥府と、そして夜の女王でもあるのだから。

そんな愛する時間に、愛する闇に……包まれているわけではなかった。

ここはすでに東京 勿論アテナは地名など知る気もない 大体の場所が煌々とした人造の光で照らされている。

ポイペはまだしも、アステリアの光は儂く届かない。

アテナは夜の街を進む、すれ違う人々を呆けさせ、狂気に貶めながら。

彼女にとって、そんな人間たちのことなど瑣末事である。

思うのは先程の一戦、時間にすれば僅かに数秒。だが、久しぶりに自らの武勇を賜るに足る戦士との戦は、思いのほか気を昂ぶらせた。本気は出さなかった、否、出せなかった。剛力の権能を揮えば敵をより強力に成さしめる。アテナの叡智はそんな警告を発していた。加減をした方が有利に戦える、そんな相手と見えるとは、やはり神殺しとの戦は面白い。

心の臓を抉ったとて油断はできない。奴らは神をも殺める戦の申し子、エレボス、否、タルタロスに落としたりとて這い上がってくるやもしれぬ。

ならば、再び戦うのだろうか？それもまた良し。今度こそ自分に対する軍備を整えてくるだろう。あの時感じた真の脅威を発揮してくるだろう。

ならば自分は《蛇》を取り戻し、女王として迎え撃とう……。

取り留めなく考えることで、鬱陶しい光を無視していたのだが、思考が途切れるとやはり我慢ならない。

人は神を讃える事を忘れてしまった。陽を讃えて生を謳歌し、夜に包まれて休む。それが正しいあり方だと言うのに！

やはり、傲慢な輩には神の掣肘が必要なだろう。制裁が必要なのだろう。

「アテナの名において命ずる。闇よ、プロメテウスの火をかき消せ。今は女神たちの時間、汚らわしき男の残滓を追い散らせ。レトよ、強くあれ！アルテミスよ、母を助けよ！この大地より、ポイペとアステリアの恵み以外を一掃せよ！」

彼女は軍神。いまだ、『闇』や『夜』は取り戻していない。

しかし、今は夜。古の自分に近い女神たちを助けることぐらいはできるのだ。

アテナの放つ言霊は靦面に効果を顕し、電灯から、車などのエンジンに至るまで、ひとつ又ひとつと文明の火が消えていくのであった。

そんな無茶楽しいビクニックをしながらの行軍も懐かしの《蛇》を間近にすれば、終わりを告げる。闇に浮き立つ心は《蛇》へと逸る気持ちに変わり、しかし、その心を抑えた。新たな戦に逸る軍神の心は、冥府と大地の女王に相応しくない。

《蛇》を取り戻す事と神殺しとの戦は、何故か彼女の中で同じ事となり、そして決定事項だった。

単に、より強壮となり戦いの野に赴く気概か、或いは迫り来る脅威を母の叡智が教えてくれたのか。

「見知らぬ神に使える巫女よ。そなたの持つ蛇の印を渡してもらいたい。……妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを超え行く者そなたの手より《蛇》を強奪する者でもある。異邦の神に属する者への非礼を、まずは詫びておこうか。」

と、言いながら、やっぱり人間を見ていないアテナは巫女 祐理の荷物であるゴルゴネイオンにその手を差し向ける。

「古の《蛇》 ようやく見つけた。これで妾は王位を取り戻す。巫女よ、後代まで語り継ぐといい。三位一体の女王が甦り、再臨した一幕を」

やはり、観客がひとりもないのは寂しいものらしい。女神たち？ 比喻ですよ、あれは。顕現していればともかく、姿が無いのはねえ……。

「これこそ古の《蛇》。ついに妾は過去を取り戻した」

暗闇の中で祐理は女神の愉悦をはっきり感じ取った。

そして、突然現れたもうひとつの気配も……

「おめでとございませす、麗しき女神よ。俺からもお祝い申し上げる」

「ほう……。この小さな島国に、まさか神殺しがふたりもいるとは……。ふふ、女王と再臨した妾と戦うは、草薙護堂の役目と思っただが……。感じていた神殺しとの戦は、あなたのことだったの

かな？ まさか、本当に祝辞を述べに来たわけではなからう」

降って湧いた仇敵の気配に、しかしアテナは悠然と答えるのだった。
「もちろん、俺が来たのは『蛇退治』のためですよ。ええ、古の英雄たちに倣おうかと思ひまして。……なにより、この国は『鋼』の楽園^{パラダイス}でして、『龍蛇』の類がいると困った事になるんです」

笑顔で答える、『死ね』と。
慇懃無礼な態度ではあったものの、咎めるものは 当のアテナですら いなかった。

「よからう。魔王の挑戦を受けて応えぬは女王の流儀に非ず。しかし、まずは名乗りを交わそう。我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女。されど、かつては命育む地の太母なり！闇を束ねし冥府の主なり！天の叡智を知る女王なり！神殺しよ、あなたに古きアテナと戦う栄誉を授けよう！」

名乗りと共にアテナの姿が変わっていった。可憐な少女から端麗な乙女へと。

年のころは17、8歳、“母性”を取り戻してなおこの年齢と言う事は、昔はそのあたりで子供を産み育むのが一般だったのだろう。或いはこの年齢にして成熟しきっているのかも？

「西条祐一、トレジャーハンターです。主に幽世と電子世界を活動範囲としています。あと、ゴーストスイーパーみたいな事もやりますよ」

争いの火種が燻っているところにガソリンを撒きに行くのが趣味のナイスガイです。

まあ、別に描写されることはないが……。そんな危険人物と自然災害^{天災}の結晶が日本の首都で合間見えたのであった。

三話 アテナ再臨（後書き）

たかまれ、俺の厨ニパワー！

変な言葉がポンポン出てくる。主にJPSに対して。

彼女の権能はどうやって決まったのだろうと考えていたら、非常に残念な答えが思い浮かんでしまったのでした。合掌

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9848x/>

カンピオーネ暴虐伝～オリピの秘宝～

2011年10月28日19時25分発行